

て貰ったときの貴重なトウモロコシは歩く長男に食べさせ、背中の子には、雨水のたまり水をのませる外はありませんでした。このままこの娘が死んでもそれまでの命と思ったり、いっそ三人で死のうかとなん度思ったことか……それは長い長い鉄橋にさしかかったときでした。

下を見ると目が廻るような高さで川の中を人間の死体と馬の死体が濁流に吞まれて行くさまはこの世の地獄絵そのものでしかありません。こんな戦争の中でもう主人は生きてゐる筈がないと思ひ、長男に「三人で死のう」と言いましたところ「いや死なん」その言葉が何千倍の励みとなりぶじ鉄橋を渡り梅林の町に着きました。町に着いて一緒に出発した六家族の中何人かに逢いましたが子供を置いて来たり、チフスで死んだ子を名もない土地に埋めて来たりあわれなことです。私は幸か不幸か「ラコー収容所から長春の収容所で死産で次男を亡くしましたが、運強く親子三人、昭和二十一年八月十八日博多港に上陸しました。

## 霊よやすらかに

福岡県 前田 トキ

私の両親は日露戦争後、郷里富山を後にし、中国の大連市に移りました。私共兄妹七人は皆満州生まれです。

私は二十二歳で、教師をしておりました主人と結婚、満州の南から北、東から西へと転勤、大東亜戦争の始まったときは、北滿の適道へ、参りました。そして終戦時は鴨緑江の近くの安東で迎えました。当時は物資の不足がひどく、配給通帳を持って安東の町中を走りまわったものでした。昭和二十年七月二十八日召集されました。働き盛りの四十歳、どこに行ったのか行方もわかりませんでした。

二十年八月九日、突然ソ連軍が安東に突入、夜はあちこちで銃声が聞こえ人のざわめきが聞こえて来ます。夫の召集した後は男児二人女児三人姑、私と心細い日々でした。あちら、こちらに暴民が侵入して来て手当り次第

に物を盗み荷車に積んでいきます。先のことを考えると、目の前は真暗やみです。それはそれは、とても不安な日々でした。安東の町は、開拓村その他からの難民で、どちらを見ても着のまのまの人ばかり。食べる物もなく幼い子供は背で死んだようになっていて。手を引いた子は足を引きずりながらも懸命に母の手にすがり歩いて行くさまは、自分達もあのやうにと思ふと、背に水の走る思いで見ているより外に仕方ありませんでした。あまりにも多勢の人間ばかりで私には手のほどこしようがなかったのです。

よくもここまで来たと思うほど、親子七人死にもせず、やせ細りながら一年たちました。昭和二十一年、応召家族から引揚げ開始となり「ああ」日本へ内地へ帰れる。お父さんにもまた逢うことが出来ると急ぎ何もない中から、私はもんぺを仕立て、救急カバンと下着を入れてた袋、子供達にも上着と下着一枚づつリュックに入れて四個出発の日を待ちました。たったこれだけが全財産でした。何もかも、うたかたの夢と消えさったのです。

平時なら八時間で奉天に着くものを鉄橋か爆破された

ため、山を歩き川を越えて三日間かかり隊列の最後尾を年寄と子供を連れての地獄道中でしたが、奉天の収容所に着いた時は、口も聞けない程疲れておりました所へ、収容所内にはコレラが発生しており、二週間も足止になったため、弱り果てていた母がとうとう力尽きて帰らぬ人となりました。年齢六十六歳、娘のお産にわざわざ満州までも来てくれた母をこんなみじめな最後をとげさせた娘の私の不幸を恨みました。お骨一片持ち帰れず、収容所の片隅の土となってしまった母でした。

奉天、錦州、コロ島と色々筆舌につくせぬことばかりですが、不幸中の幸いというか、ソ連から無事帰って参りました。イルクーツクの捕虜生活も生地獄であったと泣いて話してくれましたが自分達は、こうして帰れたことを、感謝しなければ、あの寒い満州で亡くなった母、そして戦友達の御霊に対して申し訳がたたないと申しております。